

## 〈論文〉

# 労働の社会化と貧困化と 自由な個性の形成

山口 正之

### 主体形成ではなく「保守化」の論理を問うべきである

労働の社会化の概念が、貧困化および変革主体形成の問題と関連して批判的な検討の対象となってきたのは、戸木田嘉久氏によると、「戦後第3期の貧困化論争」の時期、具体的には、1970年代の後半からだという。「この問題関心の背景には、次のような事情があるように思われる」と戸木田氏は書いている。

「まず、1970年代における種々の運動領域において革新的諸勢力が一定の前進を示すなかで、たんに労働者階級の変革意識の形成のみならず、社会変革後の管理・運営の能力がどのように形成されうるか、この点にも関心がむけられてきたということがあろう。さらに70年代後半から80年代にかけては右のような問題関心の方向からすれば負の方向に位置づけられることになろうが、経済危機と貧困化の深まりにもかかわらず労働運動の発展がこれに照応しないのはなぜか、そのような状況のもとで変革主体形成の契機・条件をどこに見出すか（言いかえれば、労働運動の階級的・民主的潮流や大衆の前衛党の発展の契機と条件をどこに見出すか）、というぐあいに、重点の移行した問題関心がみられる<sup>1)</sup>」。

この見解によると、論議の背景となったのは、ほかでもなく、70年代後半

---

1) 戸木田嘉久『現代資本主義と労働者階級』 1982年 岩波書店 66ページ

から80年代に及ぶ「戦後第二の反動攻勢」とか「保守化の時代」とか「革新冬の時代」とかよばれる変化であった、とみてまずは間違いなさそうである。だが、そうなると、この特定の時期になぜこのような「保守化」が生じたのかというすぐれて具体的な情勢分析の問題が、いわば反対に、そもそも資本主義のもとでの変革主体形成の論理とはどのようなものなのかという一般的で抽象的な理論問題として定式化された、ということになる。そうなった心理状況には理解できるものがあるとしても、やはり、具体的な問題には具体的な分析で答えるように努力するのが、本筋であったと思われる。まして、この論議の当事者たちはいずれも資本主義発展それ自体が自らの墓掘り人をつくり出すという一般的法則そのものは承認していたのだから、論点は細かな概念規定をめぐるものになりがちであった。第3期貧困化論争もしくは変革主体形成論争が、いささかスコラ的な神学論争に似たものになっていったのは、このためである。

それに、この「反動攻勢」と「保守化」は、政治、経済、文化、価値観などから国際関係までの社会生活の全側面を包括する複合的な変化であって、「労働運動の右翼的再編成」と通称されている現象は、この総体的な過程の一局面であったにすぎない。ところが、問題が主体形成の一般的な論理として提起されたために、労働運動の保守化だけが全体との関連から切り離されてそれだけのものとして孤立して取り上げられる傾向におちいりやすかったことも、否定できないのである。

そこで、問題を立て直して、この「保守化」はどうして生じたのか、また、どういう意味をもつものなのか、という観点から再出発することになると、一体、なにが見えてくるであろうか。

歴史的過程のこの時期での「保守化」と「反動化」が、多かれ少なかれ、国際的な現象であったということ、また、その一般的な基盤となったものは、「パクス・アメリカナ」、あるいはむしろ、「パクス・ルツソ・アメリカナ」の崩壊と、それが必然的に随伴した勢力圏の再分割をめぐる国際緊張の激化であるということ——、これらのことについては多くの異論はありえないとみて差し支えあるまい。もとより、現代の条件のもとでの勢力圏の再分

割には、資本主義諸国相互の関係だけではなく、いわゆる東西関係も南北関係も含まれることは、今さらいうまでもない。

ここでとくに指摘しておく必要があるのは、一度は米ソ二つの超大国支配の二極構造として編成された戦後国際秩序の「力の均衡」の再分割を強制する積極的な要因の一つとして作用したものに、日本資本主義の「集中豪雨」的進出があった、というまぎれもない事実である。ここにこそ、「70年代後半から80年代にかけて」の歴史的時期が日本資本主義にとってもっている規定的な意味があることを、見落さないようにしなければならない。

1979年の経済白書は「すぐれた適応力と新たな出発」、1980年の経済白書は「先進国日本の試練と課題」、というふうに自らを名乗った。日本資本主義は、「先進」的資本主義としての「新たな出発」に旅立つことになったのである。いいかえれば、日本資本主義は、明治開国以来の「追い付き型近代化」の局面を最終的に走り抜け、「先進国」段階に、つまりは、もっとも発達し、腐朽するばかりに爛熟した独占資本主義国家の隊列のなかに、しかも、この隊列のトップ・グループのなかに、ついに参入することに成功したのだ。レーニンが、戦前の日本資本主義に与えた周知の規定がある。「日本とロシアでは、軍事力の独占や、広大な領土の独占、あるいは異民族、中国その他を略奪する特別の便宜の独占が、現代の最新の金融資本の独占を、一部はおぎない、一部は代位している<sup>2)</sup>」。半農奴制的遺物によって、「現代の最新の金融資本の独占」が補完・代位されているような資本主義として、日本資本主義の戦前段階が、「軍事的半農奴制的資本主義」とよばれてきたことは、よく知られているとおりである。「追い付き型近代化」の完了とは、この「軍事的半農奴制的資本主義」の苦悩にみちた死滅の過程が終了し、日本資本主義は、前近代的支配によって補完される必要もなければ代位される必要もないまじりけなしの「現代の最新の金融資本の独占」としての「新たな出発」の段階を迎えた、という意味にほかならない。

---

2) レーニン「帝国主義と社会主義の分裂」『レーニン全集』④ 大月書店 123ページ

ここまでくると、日本資本主義の「先進国」段階への到達の時期における「保守化」こそが、真の問題であることが明らかとなろう。ということは、この「保守化」は、「軍事的半農奴制的資本主義」段階の「保守化」の単純な「復活」ではありえないだろう、ということである。たとい、それが、「靖国神社」や「建国記念日」や「教育勅語」などのおなじみの各種の「復古」的衣裳をまとして現われることが少なくない、としてもである。こうして、それでは、「現代の最新の金融資本の独占」としての「保守化」の「先進的」形態は、その「後進的」形態と、どこでどのように区別されるのか、というように、問題は再定式化されるということになる。いいかえれば、発達した独占資本は、「買収」と「日和見主義」によって支配するというレーニンの命題が、「70年代後半から80年代にかけて」の日本の「保守化」を解明する方法の基礎にすえられなければならないという結論に導かれることになる。

この問題について書かれたレーニンの無数の文章のなかから、「ヨーロッパのこの日和見主義はロシアのばあいよりも、なぜ強いのか」を論じた一節を、とりあえず引用してみよう。共産主義インタナショナル第2回大会でのレーニンの報告から、である。

「ここでわれわれは、ヨーロッパのこのような流派が永続していることはなにによって説明されるか、なぜ、西ヨーロッパのこの日和見主義はロシアのばあいよりも強いのかという問題を出さなければならない。それは、先進諸国が抑圧されている10億の人々を犠牲にして生きていくことができることによって、自国の文化を創造してきたし、また現に創造しているからである。それは、これらの国の資本家が、自国の労働者を略奪して利潤として手にいれられるよりも多くの額を手にいれているからである。

戦前には、もっとも富んだ三国、イギリス、フランス、ドイツは他の収入を計算にいれないで、資本の対外輸出だけから、一年間80—100億フランの収入をえていると考えられていた。

このだいいな金額のなかから、労働者の首領や労働貴族に施物をし、ありとあらゆる買収をするために、5億ぐらいを投げだしうことは、

もちろんである。すべての問題をおしつめていくと買収ということになる。……そして、これらの数十億の超過利潤こそ、労働運動内の日和見主義をささえている経済的基礎である。アメリカ、イギリス、フランスでは日和見主義的指導者、労働者階級の上層、労働貴族がはるかに強い根強さをもっている。彼らは共産主義運動に、いつそう強い抵抗をしている。だからわれわれは、ヨーロッパとアメリカの労働者党を、このような病気から解放することが、ロシアのばあいよりも困難であろうということ<sup>3)</sup>を覚悟しなければならない」。

もちろん、1920年当時のヨーロッパと現代日本では、考慮しなければならない多くの相違がある。また、「帝国主義との闘争は、それが日和見主義にたいする闘争と不可分に結合されないなら、一つの空虚な虚偽の空文句にすぎない<sup>4)</sup>」というレーニンの主張が、その後、「社会ファシズム論」や「社会民主主義主要打撃論」などに変造されて労働運動の発展に打撃を与えたというにがい歴史の教訓を忘れないように警戒することが、必要である。さらには、「買収」や「日和見主義」の特殊日本的な諸形態を軽視しないように注意することを怠らないようにしなければならない。だが、すべて以上のことを言ったあとでなおかつ、日本資本主義が「自国の労働者」だけではなく、「世界の労働者」を搾取することによって「超過利潤」をかせぎだすことのできる「先進国」段階を達成したのは、この数年間のことであり、そして、そのとき、「保守化の時代」が到来したという事実は、厳然と残るのである。そうである以上、この「保守化」を説明するに際して、「買収」と「日和見主義」についての古典的命題をとびこしてしまうのは、少なくとも誠実で真剣な研究方法とはいえないということになるのではないだろうか。

このように考えてみると、「貧困化」の法則に依拠することは、「保守化」の「先進的」形態を分析するのにはきわめて不適切な方法であることに気がか

3) レーニン「共産主義インタナショナル第二回大会」『レーニン全集』⑪ 223ページ

4) レーニン「資本主義最高の段階としての帝国主義」『レーニン全集』⑫ 349ページ

ないわけにはいかない。それは、「経済危機と貧困化の深まりにもかかわらず労働運動の発展がこれに照応しないのはなぜか」といった歎きを生み出すことはできよう。しかし、「買収」と「日和見主義」の根拠を「貧困化」によって説明することはどうしてもできない。それは、この根拠を否定することができるだけである。「貧困化」を金科玉条とするかぎり、「買収」による「日和見主義」が先進諸国の労働運動内部の根強い潮流を形成していることは、「あるべからざる悪」として道徳的な怒りの対象になりうるだけであろう。

### 「買収」と「日和見主義」は「貧困化」では説明できない

レーニンの時代にも、「現代の最新の金融資本の独占」が「超過利潤」を財源として労働者の一定の部分を「買収」することによって労働運動内部の「日和見主義」を培養できるし、現に培養しているという「不愉快な事実」から目をそむける傾向があった。かれらは主張した、「もし知的発達の中で『インテリゲンツィア』にもっとも近く、もっとも熟練した労働者群が宿命に革命的社会民主主義派を去って日和見主義にはしったとすれば、革命的社会民主主義派にとって、事態ははなはだかんばしくなく、絶望的な状態であるとさえ言えるであろう」と。

この種の「日和見主義不可能」論にたいする典型的にレーニンの批判は、次のようなものであった。

「一定の労働者層が日和見主義と帝国主義的ブルジョアジーのがわに去ったという事実を、『宿命的』に**というば**かげた言葉とある種の『すりかえ』とによって、**回避しているのだ！** しかも、組織委員会の詭弁家たちに必要だったのは、まさにこの事実を**回避すること**にほかならなかった！ 彼らは、いまカウッキーマスターのヒルファーディングその他の多くの人々が見せびらかしている、あの『お役所ふうの樂觀論』でお茶をにごす。いわく、客観的諸条件は、プロレタリアートの統一と革命的潮流の勝利とを保障している！ いわく、われわれはプロレタリアートに

かんしては『樂觀論者』である！

しかし、実際には、これらすべてのカウツキー派、ヒルファーディング、組織委員会派、マルトフ派は、……日和見主義にかんして樂觀論者なのである。これがかんじんの点である！」<sup>5)</sup>

このレーニンの批判には、現代も学ぶことのできる教訓が含まれているといってよいと思う。すでに指摘したこと繰り返しになるが、「客観的諸条件は、プロレタリアートの統一と革命的潮流の勝利とを保障している」という一般的な法則をどれほど精密に証明できたとしても、それは、「日和見主義」がなぜ形成されえたかの根拠の理論的説明を与えるものでもなければ、その「日和見主義」を克服するためにいかにたたかうべきかの実践的指針を与えることもできない。いわば、それでは、問題の「正解」にはなりえないのである。だから、つづけてレーニンは書いているのである。

「プロレタリアートは、資本主義の子——ヨーロッパ資本主義だけでなく、帝国主義的資本主義だけでもなく、世界資本主義の子である。世界的な尺度で見れば、50年早いにせよ50年おそいにせよ——こういう尺度ではかれは、これは部分的な問題である——、たしかに、『プロレタリアート』は統一を達成するで『あろう』し、プロレタリアートのあいだで革命的社会民主主義派が『不可避免的に』勝利するであらう。だが、カウツキー派の諸君。それが問題なのではなく、いま諸君がヨーロッパの帝国主義諸国で日和見主義に追従しているということが、問題なのである」<sup>6)</sup>

具体的な問題を一般理論に解消する方法のもつ危険は、ここにある。それは、具体的な困難を「回避」することによって、その困難へ「追従」する形態へと転化しうるのである。レーニンが「自然発生性への拜跪」とよんだものの、それは、理論的な方法であることに注意しなければならない。

「超過利潤」による「買収」といっても、資本主義が意図してそうするという意味ではないことは、いうまでもない。とはいっても、意図してそうするばあいもあることを否定する必要もないが。その主要内容は、発達した

---

5)6) レーニン「帝国主義と社会主義の分裂」『レーニン全集』② 118ページ

資本主義諸国の労働者は、遅れた資本主義諸国や発展途上諸国の労働者よりも相当に高い生活水準や社会的地位や教育を享受する「ゆたかな」労働者であるという明白な経験的な事実である。なかでもそのなかの恵まれた層の状態は特権的な水準にさえ到達しうるのは、日本の自動車産業の「カンバン」方式によって陥落させられるまでのアメリカの自動車産業労働者の生活状態などがよく示している。

同じことは、ある国の資本主義の発展段階の高さについてもいうことができる。戦前の日本の労働者は、ほとんど例外なしに歩いて工場に出勤した。当時は自転車ですえ稀少なステータス・シンボルであった。現代の労働者は自動車をもっているのが、通例である。戦前の労働者は辛うじて義務教育を修了しえたのみであった。現代日本の労働者は、ほとんど高卒以上であり、大学卒もうようよい。戦前の労働組合事務所は不潔でみすばらしかった。現代の労働組合事務所は豪壮なビルディングであって、一部をテナントにリースしているばあいさえある。資本主義が発展すればするほど、労働者の生活も、たえず遅れながらではあるが、また、きわめて不均等にではあるが、全体として上昇するというのが、法則である。そして、この法則のなかに、先進資本主義諸国、もしくは、資本主義的發展の「先進国」段階で生じてくる「買収」と「日和見主義」の経済的社会的根拠があり、同時にまた、この支配の「先進的」形態を克服できるし克服せざるをえなくなる経済的社会的根拠があるのである。

レーニンが、その「日和見主義」論を仕上げるにあたって、エンゲルスの手紙を重要な資料としたことは、よく知られているところである。たとえば、1858年10月7日づけのマルクスにあてた手紙のなかで、エンゲルスは書いている、「イギリスのプロレタリアートは、事実上ますますブルジョア化しており、そのため、すべての国民のうちでもっともブルジョア的なこの国民は、ついにはブルジョアジーとなら<sup>ん</sup>で、ブルジョアの貴族とブルジョアのプロレタリアートをもつま<sup>で</sup>になりた<sup>が</sup>っているように見える。全世界を搾取している国民としては、これは、たしかに、ある程度も<sup>と</sup>もな<sup>こ</sup>とである」。「プロレタリアートのブルジョア化」もしくは、「ブルジョアのプロレタリア



ート」についてのこのエンゲルスの規定は、「貧困化」愛好論者を驚倒させるに十分だと思われる。しかし、「全世界を搾取している国民としては、これは、たしかに、ある程度もっともなこものである」ことは、承認しないわけにはいかない。

1882年9月12日づけのカウツキーにあてた手紙で、エンゲルスは書いている、「じつさい当地には労働者政党はなく、保守党と自由主義的急進党とがあるだけである。そして、労働者は、イギリスの世界市場の独占と植民地独占とのおすわけにあずかって、のんびりとくらしている」。<sup>7)</sup>

エンゲルスはまた、1845年に書いた『イギリスの労働者階級の状態』の第2版によせて1892年に書いた序文のなかで、述べている、「本書で述べられている事情は、いまでは、イギリスにかんするかぎり、多くの点で過去のものになっている」。「したがって、本書でのべられているようなはなはだしい弊害は、いまでは消滅してしまったか、それとも、それほど目立たないようにされている」。「イギリスの工業上の進歩が、途方もなく巨大で、比類のないものであり、そのため1844年当時の状態は、いまでは、原始的で、とるに足らないもののように思われるとしても、すこしも不思議ではない。そこで、こうした拡大がすすむにつれて、それと同じていどに製造工業は、外見上は道徳的になってきた。労働者からこまかくかすめとるというやりかたでの製造業者相互の競争は、もはやひきあわなくなってきた。事業がこのようなけちな金もうけの手段を必要としないほど、大きくなったのである」。<sup>8)</sup>

エンゲルスは、1844年から1892年までの半世紀のあいだに、「イギリスの労働者階級の状態」は改善されたと述べているということを、否定するのは困難である。同時に、エンゲルスが、「こまかくかすめとる」「けちな金もうけ」の方法から、「外見上は道徳的な」支配の方法への転換が行なわれていることに注目していることも、明らかである。レーニンがくり返し指摘したように、発達した資本主義は、「暴力の方法」によってではなく、「改良の方法」によ

7) 同上 119～120ページ

8) エンゲルス「『イギリスにおける労働者階級の状態』イギリス版序文」『マルクス・エンゲルス全集』② 273ページ

って支配するようになる。そして、この「改良の方法」による支配への転換は、労働運動内部の「日和見主義」への偏向によって共鳴されることになるのである。

レーニンのは、当初から、資本主義から社会主義への移行の法則を説明するためにも、また、プロレタリアートの革命性の根拠を論証するためにも、「貧困化」の法則に依拠する必要はほとんど感じなかったといつてよい。むしろ、その反対でさえあった。レーニンの党は、ナロードニキ主義の批判をつうじて、その生成の道を歩み始めたことは、周知のとおりである。そして、そのナロードニキ主義批判の核心的部分は、「貧困化」による「市場の不足」によって、ロシアにおける資本主義は「不可能」になるというナロードニキの「理論」にむけられたものであった。なるほど、「貧困化」によって「市場の不足」を証明するという方法は、「貧困化」を「主体形成」の契機とするという方法とは、まったく同じだとはいえないかもしれない。前者は、「市場の不足」による「自動崩壊」論に傾斜するのにたいし、後者は、「変革主体」による「主体的」行動を重視するというふうに。だが、実は、この相違は表面的なものにすぎない。後者の「主体的」行動も、「貧困化」によって自然発生的に発展すると構想されているかぎりでは、「自然発生性への拜詭」の、つまり、「自動崩壊」論の、一形態へと容易に転化する。まさにこのことが、レーニンの『なにをなすべきか』での経済主義批判が論証しようとしたところである。<sup>9)</sup>

レーニンが、プロレタリアートの革命性の根拠としたものは、この階級の社会的性格もしくは「精神的風格」であった。具体的には、家父長制的な人格的従属の諸関係からの自由、伝統からの完全な断絶、「欲望水準」の高さ、知的文化的能力、など、簡単にいって、資本主義の発展それ自体によって形成される新しい質をもつ人間であるということによって、プロレタリアートは、根源的に革命的な階級なのだ、とレーニンは考えたのである。いささか煩雑になるが、レーニン自身の発言をいくつか引用しておくことにしよう。

「機械制大工業は、機械を農村にもちこんで、もっとも高い生活水準を特色としている熟練工業労働者を農村に導きいれる」<sup>10)</sup>「機械制大工業にあっては」「社会的対立の両極は最高の発展をとげる。資本主義のすべての暗黒

9) 変革主体形成の論理を真正面から取り上げたものはレーニンの「なにをなすべきか」(レーニン全集⑤)である。たとえば、つぎのようなものである。

「労働者階級は自然発生的に社会主義に引きつけられる、としばしば言われている。この言葉は、つぎの意味ではまったく正しい。すなわち、社会主義理論は、もっともふかく、またもっともただしく労働者階級の困苦の原因を規定しているのも、もしこの理論自身が自然発生的に降伏させなければ、もしそれが自然発生的性を自己に従属させさえすれば労働者はこの理論をきわめて容易にわがものにする、という意味である。普通ならこれは自明のことだが、『ラボー・チェエ・デーロ』は、まさにこういう自明のことをわすれ、また歪曲する。労働者階級は自然発生的に社会主義に引きつけられるが、それにもかかわらず、労働者に自然発生的にもっとも多く押しつけられてくるものは、もっとも普及している(そして、たえず多種多様な形で復活されている)ブルジョア・イデオロギーである」(409ページ)。

「経済闘争が一般に、大衆を政治闘争に引き入れるために『もつとも広範に適用しうる手段』であるというのは、正しいであろうか? まったくちがっている。警察の圧制や専制の乱暴のありとあらゆる現れも、このような『引きいれ』のために『広範に適用しうる』手段である点ですこしもおとるものでなく、けっして経済闘争に関連のある現れだけがそういう手段なのではない。……労働者が(自分自身のこととなり、その身寄りの人々のこととなり)日常生活で無権利や専横や暴行にくるしめられるばあいの総数のなかでは、まさに職業的闘争で警察の圧制をこうむるばあいがほんの一小部分を占めるにすぎないことは、疑いがない。では、社会民主主義者にとって、一般的にいって、ほかにもこれにおとらず『広範に適用しうる』手段がいろいろなければならないのに、いつたいなんのためにただ一つの手手段だけを『もつとも広範に適用しうる』手段であると宣言して、あらかじめ政治的煽動の規模をせばめるようなことをするのか?」(427～428ページ)。

「経済主義者とこんにちのテロリストとは一つの共通の根がある。すなわち、……あの自然発生的性への拜跪が、それである。一見したところでは、われわれのこの主張は逆説のようにおもわれるかもしれない。『平凡な日常闘争』を強調する人々と、個々人のもっとも自己犠牲的な闘争を呼びかける人々とは、それほどまでに大きな相違があるように見える。しかし、これは逆説ではない。経済主義者とテロリストとは、自然発生的潮流のあいことなる対極のまゝに拜跪するのである。すなわち、経済主義者は『純労働運動』の自然発生的性のまゝに拜跪するし、テロリストは、革命的活動を労働運動に結びつけて渾然一体化する能力をもたないか、またその可能性をもたないインテリゲンツィアの、もっとも熱烈な憤激の自然発生的性のまゝに拜跪するのである。それを結びつける可能性を信じなくなった人、あるいはまだいちども信じたことのない人には、テロルのほかには自分の激昂した感情と自分の革命的精力とのほけ口を見いだすことは、実際に困難である」(446～447ページ)。

10) レーニン「ロシアにおける資本主義の発展」『レーニン全集』③ 572ページ

面があたかも一ヵ所に集積されているかのようになる」。「しかし、工場によって巨大な規模で行なわれる労働の社会化と、工場で働く住民の感情および観念の改造（とくに、家父長制のおよび小ブルジョア的な伝統の破壊）とは、反動をよびおこす。機械制大工業は、それ以前の段階とはちがって、計画に則した生産の規制と生産にたいする社会的統制とを、緊切に要求する<sup>11)</sup>」。

プロレタリアートは、「古い農民層とはまったく無縁なものであり、別の生産構造、家族関係の別の構造によって、また物質的および精神的欲望のより高い水準によって、農民層と異なっている」。「国のすみずみからあつまってくることもまれではない数多くの労働者をひとまとめに集中する機械制大工業は、家父長制の遺物や人格的隷属の遺物とはもはや絶対に和解しないのであって、『過去にたいする真に軽蔑的な態度』を特色とする。そして、古くなった伝統とのこの絶縁こそ、生産の調整と生産にたいする社会的統制との可能性をつくりだし、その必要性をよびおこした、社会的諸条件の一つであった」。「機械制大工業は、以前は家内的、家族的関係の狭い枠からでたこともなかったこの部類の人口の家父長制的封鎖性を破壊し、彼らを社会的生産に直接に参加させながら、彼らの発展を前進させ、彼らの自立性を高める。すなわち、それは、前資本主義的關係の家父長制的な不動性とは比較にならないほど高い生産条件をつくりだすのである<sup>12)</sup>」。

同じ意味で、「都市への出稼ぎ」もまた進歩的な現象である。「それは、うちすてられた、時代おくれの、歴史からわすれられた僻地から住民をひきずりだし、現代の社会生活の渦中にひっぱりこんだ。それは、住民の読み書き能力とその自覚を高め、住民に文化的慣習と文化的欲望とをうえつけた」。「都市への出稼ぎは、農民の市民的性格を高め、農村で非常に強い家父長制的な人格的隷属関係や身分制の地獄から、彼を解放する<sup>13)</sup>」。

聞きたまえ、かくて、レーニンはいうのだ。

「機械制大工業をそれ以前の工業形態から区別する上述の諸特徴は、労働の社会化という言葉で要約することができる。実際に、巨大な国民的

11) 同上575ページ 12) 同上576～577ページ 13) 同上608～609ページ

および国際的市場のための生産も、原料および補助材料の購入にかんして行われる国内の種々の地方との、またいろいろな国との密接な商業的つながりの発展も、巨大な技術的進歩も、巨大企業による生産と人口との集積も、家父長制的生産様式のごびた伝統の破壊も、人口の移動性の創造も、働き手の欲望水準や発展水準の向上も、——すべてこれらのことは、国の生産を、またそれとともに生産の参加者を、ますます社会化していくこの資本主義的過程の要素なのである<sup>14)</sup>」。

### 労働の社会化が「貧困化」の内容である

以上のことは、資本主義的発展の不均等で敵対的な諸形態のなかに「貧困化」がたしかに含まれていることを、すこしも否定するものではない。ただ、「貧困化」は、いろいろな国に、さまざまな社会階層に、異なる諸産業に、また、個人の生涯の異なる時期に、きわめて不均等に配分される。資本主義的発展は、つねに、「一方の極における富の蓄積」を「他方の極における貧困の蓄積」であがなうような敵対的な形で進行する。しかし、その「富」を受益する個人や産業や国家はたえず交替し、したがって、「他方の極」での「貧困」の被害者もつねに入れかわる。一獲千金の幸運にあずかるものがあるかと思えば、破産して自殺に追いこまれる億万長者もいる。レーニンは書いている、「この改変の過程は、資本主義の本性そのものによって、一連の不均等と不均衡のうちでよりほかには、進行しえない。すなわち、繁栄期は恐慌期にとってかわられ、ある産業部門の発展は他の部門の衰微にみちびき、農業の進歩はある地区では農業の側面を、他の地区では他の側面をとらえ、商工業の成長は農業の成長を追いこす、等々」<sup>15)</sup>。

この不均等発展の法則は、各国間の力関係のなかにも、もちろん、貫徹す

14) 同上580～581ページ

15) レーニン「ロシアにおける資本主義の発展」『レーニン全集』③ 632ページ

る。昨日までの「ゆたかな」国が、今日は、昨日までの「まずしい」国によって追い抜かれるというのは、帝国主義国際関係の特徴となっている。そして、同じ法則が、「ひとにぎりのもっとも富裕な国ぐに」で「プロレタリアートの上層部を買収する経済的可能性」をつくりだすととともに、その日和見主義の勝利の経済的根拠をたえずほりくずす方向に作用するのである。

「帝国主義は、世界の分割と、中国にかぎらぬ他国の搾取とを意味し、ひとにぎりのもっとも富裕な国ぐにが独占的高利潤をえることを意味するが、その帝国主義は、プロレタリアートの上層部を買収する経済的可能性をつくりだし、そのことによって日和見主義を培養し、形成し、強固にしている」<sup>16)</sup>。

「資本主義的独占体は、国民経済でも政治でも首位を占めた。世界の分割はすっかり行われた。他方では、イギリスの全一的な独占にかわって、少数の帝国主義的列強のあいだでの、独占に参加するための闘争があるが、この闘争こそ20世紀の初頭全体を特徴づけるものである。日和見主義は、もはや今日では、それが19世紀の後半にイギリスで勝利を得たように、数10年の長きにわたってある一国の労働運動における完全な勝利者となることはできない」<sup>17)</sup>。

さらに、「貧困化」は資本主義的搾取と抑圧の多様な諸形態のなかの一つにすぎないことにも、注意しなければならない。「搾取」とは、結局のところ、社会的生産過程にたいする私的支配のことにほかならない。エンゲルスはいう。「こうして、いまでは生産物は社会的に生産されるようになったのに、それを取得するのは、生産手段をじっさいにうごかし、生産物をじっさいにつくりだした人々ではなく、資本家であった。生産手段と生産は本質的に社会的なものになった。だが、それらは、個々人の私的生産を前提とする取得形態、したがって、各人が自分自身の生産物を所有し、それを市場にもちこむばあいの取得形態にしたがわせられる。生産様式は、このような取得形態の

16) レーニン「資本主義の最高の段階としての帝国主義」『レーニン全集』② 324ページ

17) 同上329ページ

前提を廃止したにかかわらず、この取得形態に従わせられるのである。この矛盾が新しい生産様式にその資本主義的性格をあたえるのであるが、この矛盾のうちに現代の衝突の全体がすでに萌芽としてふくまれている<sup>18)</sup>。

この「現代の衝突の全体」のなかには、たとえば、政治の腐敗、汚職、わかものの「生きがい」の喪失、青少年の非行、そして、熱核世界戦争や地球環境の破壊の脅威、などが含まれる。このすべてが、階級闘争の全系列を構成する。だから、レーニンはいったのである。

「農民司政長や農民の体罰、役人の収賄や都市『庶民』をとりあつかう警察のやり方、飢えた人々にたいする闘争や、光明と知識にたいする人民の渴望の迫害、税金のむごい取立てや異宗派の迫害、兵士のきびしい訓練や学生と自由主義インテリゲンツィアをとりあつかう兵士のやり方——『経済』闘争に直接関連のないこれらすべての圧制の現れや、その他幾千の同様な圧制の現れは、なぜ一般に政治的煽動のため、大衆を政治闘争へ引きいれるために、前者ほど『広範に適用しうる』手段やきっかけでないのか？ 事実はまさにその反対である<sup>19)</sup>。

経済闘争「還元」主義ともいうべき傾向に反対して、レーニンは、機会あるごとに、階級闘争の無限の多様性を強調した。たとえば、「社会主義革命」は、「ドレフュス事件や、ツアーベルン事件のような、どんな政治的危機からでも、あるいは被抑圧民族の分離にかんする人民投票などと結びついても、燃えあがりうるのである<sup>20)</sup>。「日和見主義」の伝統がもっとも強いイギリスについて、レーニンは、同じことを指摘して書いている。

「大衆をはんとうの、決定的な、最後の、偉大な革命的闘争へ導いていく具体的な道、あるいは事件の特別な転換を見つけたし、探りだし、正確に決めうること——まさにここに西ヨーロッパとアメリカのこんにちの共産主義者の主要な任務がある。

18) エンゲルス「オイゲン・デューリング氏の科学の変革」『マルクス・エンゲルス全集』② 279～280ページ

19) レーニン「なにをなすべきか」『レーニン全集』⑤ 427～428ページ

20) レーニン「社会主義革命と民族自決権」『レーニン全集』② 168ページ

その実例はイギリスである。われわれはイギリスでほんとうのプロレタリア革命がいつ燃えあがるか、いまのところまだ眠っているきわめて広範な大衆を、どんなきっかけがもっとも多く目ざめさせ、燃えたたせ、闘争へ駆りたてることになるかを知ることができないし——だれもまえてきめることはできない。……議会の危機が『突破口をつくり』、『糸口をつける』かもしれない。手のつけようがないほどもつれており、ますます病根をふかくし、するどくなっている植民地と帝国主義の矛盾から危機が生じるかもしれない。また、第三のなにかがおこるかもしれない。……たとえば、フランス・ブルジョア共和国では、国際的な側面からみても、国内的な側面からみても、現在の100分の1も革命的でなかった情勢のもとで、反動軍閥の何千という恥ずべき陰謀の1つ(ドレフュス事件)のような、『思いがけない』、『ちっぽけな』きっかけがあっただけで、国民を内乱寸前に導いたということを、わすれないようにしよう。

イギリスの共産主義者は、議会選挙をも、イギリス政府のアイルランド政策、植民地政策、世界帝国主義政策上のあらゆる急変をも、社会生活のその他のすべての分野、範囲、側面をも、たえまなく、うむことなく、確固として利用し、すべて利用し、すべてこういう仕事では新しいやり方で、共産主義的なやり方で、第二インタナショナル流にでなく、第三インタナショナル流に活動しなければならない<sup>21)</sup>。

このような「社会生活」の「すべての分野、範囲、側面」にわたる「現代の衝突の全体」を包括するうえで、また、この衝突の全体の過程をつうじての変革主体形成の動態を解明するうえで、「貧困化」はあまりにも狭すぎる概念だといわなければならない。1954年のビキニ被災を「きっかけ」とした原水爆禁止運動の嵐のような発展、1960年の国会での強行採決を「きっかけ」とした安保闘争の壮大な高揚、のいずれをとっても、「貧困化」だけに押しこめて説明するのは、無理な話というものである。

21) レーニン「共産主義内の『左翼主義』小児病」『レーニン全集』② 86～87ページ



その当然の結果として、戦後の「貧困化」論争は、「貧困化」の概念を際限もなく拡大していく過程となった。いまでは、「貧困化」概念は、資本主義的な搾取もしくは抑圧一般からほとんど区別することができないまでに具体的な内容を抜きとられてしまってきているのである。したがってまた、「貧困化」は、現代資本主義の複雑な諸矛盾を解明する理論的用具としての有効性を失い、変革主体の「行動の指針」を提起する実践的な意義を期待できないものであることが、ますます明らかになってきている、といわなければならない。

こうして、人びとはあらためて知るのだ。富と貧困の対立一般について論じるのではなく、その資本主義的形態の歴史的な規定を析出することが、あるいは、貧困のたんに量的な増大ではなく、その質的な内容の特殊性を解明することが、科学的社会主義の理論が自らに課した問題であった、ということ。富の資本主義な形態は資本であり、その人格的な表現が資本家である。貧困の資本主義的な形態は自由な雇用労働であり、その人格的表現が賃金労働者であり雇用労働者であり、つまりは、現代プロレタリアートである。貧困の資本主義な形態の歴史的特徴はなにかと問うことは、自由な雇用される賃労働は、資本主義以前の奴隷制的、家父長制的、農奴制などの諸労働と、どこでどのように区別されるか、と問うことにほかならない。

富と貧困の対立一般は、いつの時代にも存在した。別に資本主義時代になってはじめて生れたというわけではない。しかし、富と貧困の対立の資本主義的な形態だけが、「社会的生産過程の最後の敵対的形態」たりうるのである。貧しい生産者は、いつの時代にも存在した。なにも資本主義時代がはじめて生産者を貧困化したわけではない。しかし、近代プロレタリアートだけが、「階級一般の存立条件を廃止し、それによってまた階級としての自分自身の支配をも廃止しうる」<sup>22)</sup>最後の階級たりうるのである。

したがってまた、変革主体の形成のあとで統治能力が必要になってくる、といった発想は、根本的に、限りなく、誤まっている。レーニンが、「よろし

22) マルクス・エンゲルス「共産党宣言」『マルクス・エンゲルス全集』④ 495ページ

い、権力を奪取したのちに、当然規律のことをうたいはじめたらよい」というような「卑俗な素町人的な考え」<sup>23)</sup>をどんなにきびしく批判したか、を忘れないようにしなければならない。むしろ、反対である。プロレタリアートは、統治主体として形成されるまでは、変革主体として形成されることは、決してありえないのだ。その「変革」が、絶望的な一揆や衝動的な反抗やたんなる暴動などを意味するだけのものでないかぎりでは。そして、「貧困化」が変革主体形成の論理を与えないのは、それが、まさに、統治主体形成の論理を与えないからである。

それだけではない。資本主義的發展は、プロレタリアートを新しい統治主体として、しかも、「階級一般の存立条件を廃止」できるような新しい統治主体として、たえず、不可避免的に形成するというだけでもない。それは、新しい人間を、全面的に発達した人間を、「自由な個性」を、形成するのである。

「すべての自己実現から締めだされている現代のプロレタリアートだけが、自らの完全な、もはや限られたものではない、自己実現を、完遂することができる。この自己実現は、生産諸力の全体の掌握のなかに、また、それによって規定される諸能力の全体の發展のなかに、存するのである」<sup>24)</sup>。

「諸個人の全面的な發展のうえに、また諸個人の共同的社会的生産性を諸個人自身の社会的能力として支配することのうえにきずかれた自由な個性が、第3段階である」<sup>25)</sup>。

かくて、人びとは知るのである、貧困と抑圧の資本主義的な形態が、資本主義以前のすべての貧困と抑圧から区別される本質的な契機は、自由な賃労働とは、自由でありながら、しかも、社会化された労働であるという事実のなかにある、ということ。「貧困化」を労働の社会化から区別された特別の

23) レーニン『『左翼的』な見解と小ブルジョア性について』『レーニン全集』② 357 ページ

24) マルクス・エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』『マルクス・エンゲルス全集』③ 64 ページ。ただし、翻訳は私自身のものである。

25) K.Marx, *Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie*, Dietz Verlag Berlin, 1953, S.75

要因に仕立てる必要はない。資本主義による労働の社会化こそは、「貧困」に資本主義的な性格を賦与するそのものなのだ。逆にいえば、資本は労働を社会化することによってプロレタリアートを支配するのであり、またそうであるから、資本は、その発展によって、自らの死滅を準備するのである。いいかえれば、「現代の衝突の全体」は、「資本主義的取得と社会的生産の矛盾」として要約できるのであって、この矛盾は、労働の社会化によってなくずしに緩和されるのではなく、反対に幾百幾千もの形態で激化するのである。労働の社会化の法則が、そのまま、資本主義による階級闘争の発展の法則にほかならない。

### 「崩壊論争」と労働の社会化

「貧困化」論争は、もともと、ベルンシュタイン修正主義をめぐる20世紀初頭の30年間にわたってヨーロッパの指導的なマルクス主義者の多数をまきこんで行なわれた「資本主義崩壊論争」の一部として、始まったものである。「崩壊理論」(Zusammenbruchstheorie)というターミノロジー自体ベルンシュタインが創作したものであって、かれは、マルクスの「崩壊理論」はもはや時代遅れとなったと主張した。そこで、ベルンシュタイン修正主義にたいする批判は、多かれ少なかれ、「崩壊理論」を「論証」することによってマルクス主義の「正統性」を擁護するという形式をとることになった。いま、この複雑多岐にわたった論争の細部に立ち入ることはできないが、主要な論点となったものは、経済恐慌の激化(これはこれで、生産の無政府性説と過少消費説の二つに大別される)、資本の有機的構成の高度化による利潤率の低下、そして、貧困化による市場の不足、もしくは、剰余価値の実現の不可能、などであった。全体として、論争は、再生産表式論争として、いいかえれば、「実現」論争として、行なわれたといつてよからう。ここで、「貧困化」が「崩壊理論」の重要な支柱として位置づけられることになったのである。

注意しなければならないのは、この論争の大部分は、社会民主主義者の内部論争として行なわれたものであって、レーニンとボルシェヴィキは、ほとんどまったく参加しなかった、という事実である。レーニンは、当時、ナロードニキの主張、「貧困化」による「市場の不足」と剰余価値の「実現」の不可能によって「資本主義の不可能」を「論証」しようとするやりかた、つまりは、あとでローザ・ルクセンブルグが『資本蓄積論』で展開した論法そのものを批判することによって、すなわち、資本主義の「崩壊」ではなく、資本主義の「発展」が社会主義への必然的移行の条件をつくり出すということの「論証」に努力することによって、レーニンの党の形成のために、いいかえれば、まさにロシアにおける変革主体の形成のために、たたかっていたのである。

そして、レーニンが、ひきつづいて、その「買収」と「日和見主義」の理論を発展させたとき、ベルンシュタイン主義はこの「日和見主義」の先蹤として位置づけられるとともに、当初はベルンシュタイン修正主義の批判者として登場したはずのカウツキーやヒルファールディングなども「日和見主義」への追従者（ただし追従者であって日和見主義者そのものでは必ずしもない）に転落していった根拠もまた、明らかにされることになった。

このように、「貧困化」論争は、レーニンの理論とは本質的に無縁な、社会民主主義者の内部論争であったという歴史的な経過があいまいにされてきたのには、それなりの一定の理由がある。それは、レーニン以後の第3国際ナショナルの理論が、とりわけ世界経済恐慌の時期に、生産力の発展に対応しえない「市場の不足」を資本主義の「基本矛盾」とみなす方向に、著しく傾斜するようになった、という事情である。<sup>26)</sup>この偏向は、しかしながら、科

26) 「ローザの新著『資本蓄積論』を読んだ。大まちがいをやっている！マルクスを誤り伝えている。パンネクックも、エクシュタインも、O・パヴァーも、一致して彼女を非難し、私が1899年にナロードニキにたいして言ったことと同じことを彼女にむかって言った。『プロスヴェシチェニエ』第4号にローザのことを書くつもりでいる」（レーニン「新聞『ソツィアルデーモクラート』編集局へ」『レーニン全集』<sup>35</sup>86ページ）。

なお、レーニンはこのローザ批判は書かないままで終わった。

学的社会主義の学説のスターリン主義的歪曲の典型的な一例であったと考えるべき正当な根拠がある。

レーニン自身は、「崩壊論争」の論理の経済主義とはまったく異なる次元から、また、ナロードニキ批判の当初から、「労働の社会化の結果として資本主義体制が不可避免的に社会主義に転化するというマルクスの立証<sup>28)</sup>」に確固として依拠し、一貫してそれを発展させるために努力した。かれは述べている。

「労働の社会化は、幾千の形態でますます急速に前進しており、マルクス死後の半世紀のあいだに、大規模生産の成長、資本家のカルテル、シンディケートおよびトラストの成長にも、また金融資本の規模と威力の非常な増大にも、とくにまざまざと現れているが、——これこそ、社会主義がかならずくるということの、主要な物質的基礎である<sup>29)</sup>」。

「崩壊理論」の擁護者たちが、このレーニンの命題を理解できなかったばかりか、逆に、「労働の社会化」の思想がベルンシュタイン修正主義の基礎をなしていると考えたという事実こそ、深甚な興味をよぶ。このことは、たとえば、ローザ・ルクセンブルグがベルンシュタイン批判の初期の論文として書いた『社会改良か革命か』をみても、あきらかである。

ローザは、このなかで、「社会主義の科学的基礎づけ」の三つの要素をあげている。その第一は、「資本主義の死滅を不可避免的な結果たらしめる資本主義経済の増大する無政府性」であり、第二は、「未来の社会制度の実際的な萌芽をつくりだす生産過程の社会化の進展」であり、第三は、「迫りくる革命の積極的要因をなす成長しつつある組織と階級意識」である。ローザによると、第一の「無政府性」がもたらす「全般的な経済的崩壊」を認めるかどうか、真のマルクス主義と改良主義を区別する試金石である。ベルンシュタインの修正主義は、第一の「経済的崩壊」を否定し、第二の「社会化」と第三の「組織と階級意識」を認めるだけにとどまったところに、思想的根拠をもってい

27) 当時のヴァルガ理論がその典型である。なお拙稿「経済発展論と停滞理論の諸問題」『近代経済学と史的唯物論』新日本出版社所収、を参照。

28) レーニン『『人民の友』とはなにか』『レーニン全集』① 185ページ

29) レーニン『カール・マルクス』『レーニン全集』② 59ページ

る、というのがローザの主張であった。

「科学的社会主義の立場からすると、社会主義革命の歴史的必然性はなによりもまず、資本主義をぬけ道のない袋小路に追いこむその増大する無政府性のうちにたち現われるものだ。ベルンシュタインとともに資本主義の発展はそれ自身の死滅の方向にむかっていないということを容認したとすると、社会主義は客観的必然的存在たることをやめる。そうすると、社会主義を科学的に基礎づける場合の三つの礎石のうち、生産過程の社会化とプロレタリアートの階級意識という資本主義制度の他の二つの結果が残されているだけとなる」。<sup>30)</sup>

一見して明らかなように、「生産過程の社会化」<sup>31)</sup>と「無政府性」とは、相互に切り離されて関連のない別箇の2つの要素として取り扱われている。別の言葉でいえば、ローザは、問題なのは、ほかでもなく、「社会的生産の無政府性」であることを、理解できなかったか、または忘れたのである。なお、『資本蓄積論』では、「無政府性」というよりは、むしろ、「剰余価値の実現の不可能」が、「全般的な経済的崩壊」の根拠とされたことについては、すでに指摘した。論点は移動したが、「経済的崩壊」と「ぬけ道のない袋小路」を期待する待機主義が、ローザの一貫した思想的特徴であることは、否定すべくもない。これは、「ぬけ道のない袋小路」についてのレーニンの見解と鋭く対比されるところである。

「ときとすると革命家たちは、危機には絶対に活路がないことを説明しようとしてとめている。これは誤りである。絶対に活路のない情勢というものはない。ブルジョアジーは凶々しくなった、正気を失った猛獣のようなふるまいをしている。彼らは、つぎつぎとばかげたことをやり、情勢を激化させ、自分の破滅をはやめている。すべてそのとおりである。だが、ブルジョアジーが被搾取者のある少数のものを、あるちっぽけな

30) 『ローザ・ルクセンブルグ選集』第1巻 野村修他訳 現代思潮社1970年161ページ

31) なお、「生産の社会化」と「生産手段の社会化」と「労働の社会化」を区別することは無意味だと思う。マルクス、エンゲルス、レーニンの全文献でこれらはすべて互換的に使用されていることは明らかである。

譲歩で眠りこませたり、抑圧され搾取されているもののある部分の、ある運動なり、蜂起なりを鎮圧したりする可能性が絶対にないことを『証明』することが、できるものではない。『絶対』に活路がないことを、まあもって『証明』しようとするのは、空っぽな術学か、さもなければ概念と言葉をもてあそぶことであろう。このことやこれに類した問題のほんとうの『証明』となりうるのは、実践だけである<sup>32)</sup>。

重要なことは、「生産過程の社会化」と「増大する無政府性」を切り離す形面上学的思考方法が、現代日本の変革主体形成論争でも頑強に生き残っている、ということである。「労働の社会化」と「労働の貧困化」を切り離して、前者は社会主義のための客観的条件を成熟させるが、変革のための主体的行動、もしくは、階級闘争の必然性は、「貧困化」によって与えられる、といった発想が、それである。この発想でなにか脱落しているかというと、資本主義による、あるいはむしろ、商品生産による（資本主義的生産は商品生産一般の最高の形態である）労働の社会化は、「敵対的形態」において進行するという自明の基本的な法則の認識そのもの、である。

「貧困化」論争で、くりかえして引用されてきた『資本論』の有名な一節がある。「資本が蓄積されるにつれて、労働者の状態は、彼の受ける支払がどうであろうと、高かろうと安かろうと、悪化させざるをえない<sup>33)</sup>」、というのが、それである。この一節は、実質賃金が上昇しても、「貧困化」は貫ぬいていることを示すものだといわれる。また、問題は、この「労働者の状態」の「悪化」を、せまく賃金その他の労働条件だけに限定することなく、「全面的」に「重層的」に、「トータル」に、把えることだといわれる。それはそのとおりには違いないが、この「労働者の状態」の「悪化」の本質的なモメントをさらに明らかにする必要があるだろう。マルクスは、この一節の数ページ前でつぎのように書いている。

「労働者たち自身のますます大きくなり、そしてますます多く追加資本に転化するようになる剰余生産物のうちから、以前よりも大きい部分が

32) レーニン「共産主義インタナショナル第2回大会」『レーニン全集』㉔ 219ページ

33) 「資本論」Ib 大月書店 840ページ

支払手段の形で彼らの手に還流してくるので、彼らは自分たちの享樂の範囲を広げ、彼らの衣服や家具などの消費財源をもっと充実させ、小額の準備金を形成することができるようになる。しかし、衣服や食物や取り扱いがよくなり特有財産がふえても、それは、奴隷の従属関係や搾取を廃止しないのと同じように、賃金労働者の従属関係や搾取をも廃止しはしない。資本の蓄積につれて労働の価格が上がるということが実際に意味しているものは、ただ、すでに賃金労働者が自分で鍛え上げた金の鎖の太さと重みとがその張りのゆるみを許すということではないのである<sup>34)</sup>」。

すなわち、「労働者の状態」の「悪化」とは、賃金労働者の「自分で鍛え上げた金の鎖」への「従属関係」が、さらに「太く」なり、「重く」なる、という意味にはかならない。それでは、「労働の価格」の上昇や「消費財源」の増加にもかかわらず、「金の鎖」への労働者の隷属は、「資本の蓄積」とともに悪化するの、どうしてであろうか。あるいは、そもそも「金の鎖」とはどのようなものであろうか。『ドイツ・イデオロギー』はいう。

「第一に、生産諸力は、諸個人から完全に独立してもぎはなされたものとして、諸個人と相並ぶ1つの独自の世界として、現われる。そうなった理由は、諸個人が、かれらの諸力が生産諸力であるというのに、ばらばらに相互に対立して存在しているのにたいし、他方では、この諸力は、これらの個人の交通と結合においてのみ、現実的な諸力である、ということにある。かくて、一方では、生産諸力の全体性があるが、それは、いわば、ある物的な姿をとっていて、諸個人自身にとっては、もはや、諸個人の諸力ではなく、私的所有の諸力であり、したがって、それは、諸個人が私的所有者であるかぎりでの諸個人の諸力なのである。以前のいかなる時代でも、諸個人としての諸個人の交通にとって、生産諸力がこのようにも無縁な姿をとったことはなかった。それは、その交通自体が、なお、限られたものであったからである」。

34) 同上 807ページ



「かくて、いまや、諸個人が、現存する生産諸力の全体性を掌握しなければならないところまできた。たんにそれがかれらの自己実現となるためだけではなく、総じてすでにかれらの生存を確保するためにも、である。この掌握は、まずもって掌握さるべき対象——一つの全体性にまで発展し、普遍的な交通の内部にのみ存在する生産諸力によって、規定される。この掌握は、かくて、この面からも、生産諸力と交通とに適合する普遍的な性格をもたざるをえないのである」<sup>35)</sup>。

「あらゆる従来の占有の場合には一群の諸個人がただ一つだけの生産用具のもとへ隷属させられたままであったが、プロレタリアの占有の場合には一群の生産用具が各個人のもとへ隷属させられ、そして所有は万人のもとへ隷属させられねばならない。現代的普遍的交通は万人のもとへ隷属させられることによってしか諸個人のもとへ隷属させられることはできない」<sup>36)</sup>。

したがって、「金の鎖」とは、「世界市場」にまでグローバルに展開された普遍的な相互依存の交通関係として編成された現代の社会的生産力そのもののことである。この普遍的な生産力は、諸個人の協働によってつくりあげられたものであるにもかかわらず、ばらばらの個人にとっては、どうにもならないもの、疎遠でよそよしいもの、物的なもの、として現われる。なぜかといえば、生産力のこの普遍的な展開は、自然発生的に行なわれたものであって、これをつくりあげた諸個人の協働は、意識的に行なわれたわけではなく、「万人にあいする万人のたたかい」の無政府的な発展の事後的な総括として、そうなったものにすぎないからである。

したがって、この「金の鎖」からの個人の解放は、普遍的に社会的な生産力の全体性 Totalität を、万人の手に、すなわち、諸個人の意識的な全人類的な協働によって、掌握するときのみ、可能となる。現代の労働者は、個人として失なうべきものは、いいかえれば、個人として「これは私のものだ」と

35) 「ドイツ・イデオロギー」『マルクス・エンゲルス全集』③ 62～63ページ。翻訳は私自身のものである。

36) 同上 64ページ

主張できるものは、なにもない。かれの解放は、「世界市場」にまで展開された社会的生産力の万人による掌握としてのみ、世界的全体の掌握としてのみ、完遂されうるのである。

このことが、商品生産の発展による家父長制的従属関係からのばらばらの個人の解放と、その個人の「市場」という「無情な現金勘定」による再結合に始まり、この商品生産による労働の社会化の敵対的で無政府的な抗争のなかからの自由な賃労働者の協業の形成へと発展し、そして、このマニファクチュア的分業に推進される社会的分業の発展へとつながり、やがて、「世界市場」としての帝国主義的国際関係として形成される「社会的生産の最後の敵対的形態」として終結する資本主義的発展の全行程なのである。これを理解できないものは、『資本論』を読んだということができない。

労働の社会化は、その「最後の敵対的形態」にまで到達したときに、諸個人を「金の鎖」への従属から解放することによって、真に「自由な個性」として完成できるし、また、そうしなければその生存さえおぼつかないような、「人間社会の前史」の終末点を迎える。

労働の社会化の法則が、かくて階級闘争と世界史的革命の法則となるのである。